

「動詞複合体」における定名詞の許容

ドイツ語と日本語を例に*

今西一太

0. はじめに

本稿では、英語、日本語などのNV複合語（“berry-picking”，「缶けり」など）・抱合・疑似抱合などの、動詞的要素（動詞、動名詞など）と名詞・副詞などの組み合わせについて論考する。動詞的要素と名詞・副詞などの組み合わせを本稿では便宜上「動詞複合体」と呼ぶことにする。

動詞複合体において動詞と組み合わせる名詞は通常意味的に不定（indefinite）かつ非指示的（non-referential）の解釈を受ける。しかし、ドイツ語の動詞句話題化構文、及び日本語の複合語では定（definite）・指示的（referential）の名詞を動詞と組み合わせることが可能である。本稿ではこれが可能である原因を探り仮説を提示する。

定の名詞句とは、話し手・聴き手の双方に共通理解があるものとして話し手が発話した名詞句、不定の名詞句とは、共通理解が無いものとして発話した名詞句を指す。指示的な名詞句とは、現実世界や仮想世界に指示対象が存在する・存在した名詞句、非指示的な名詞句は指示対象が存在しない名詞句を指す。例えば、「太郎は（何でもいいから）本が読みたい」の「本」は非指示的（指示対象が無い）、「太郎は本を買った」の「本」は指示的（指示対象を持つ）に解釈される。

本稿の構成は以下のようになっている。まず第1節で抱合・疑似抱合・NV複合語など、動詞複合体の具体的な例を見る。次に第2節においてドイツ語の動詞句話題化構文について述べ、続く第3節で日本語の複合語の記述を行う。第4節でドイツ語および日本語で定名詞と動詞の組み合わせが可能である理由について議論し、第5節でまとめを行う。

* 本稿の執筆にあたっては、吉田光演先生に非常に多くのご助言・ご指摘をいただいた。また、匿名の査読者の方一名からは、本稿の修正に関して多くのご指摘をいただいた。ここに謝意を表したい。また、ドイツ語話題化構文での定名詞の許容に関しては富田愛佳氏、日本語の複合語に関しては Marianne Mithun 先生との議論に負うところが多い。ここに感謝申し上げる。

1. 動詞複合体 (抱合・疑似抱合・NV複合語)

動詞複合体には大まかに分けて「抱合」「疑似抱合」「NV複合語」の三種類がある。

抱合 (incorporation) は名詞を動詞に組み込んで新しい語彙を作る一種の複合語形成であり、抱合された名詞は必ず不定 (indefinite) かつ非指示的 (non-referential) である (Sapir (1911), Mithun (1984), Gertz (1998)など)。抱合された名詞は語としての独立性を失い、動詞の形態素の一部のように振る舞う。以下 (1) にナワトル語の例を挙げる。(1a) は抱合の例であり、(1b) は抱合せずに名詞を外置した例である (Sapir 1911: 260)。

- (1) a. ni-**nica**-qua
I-flesh-eat
“I eat flesh, I am flesh-eater.”
- b. ni-c-qua in **nacatl**
I-it-eat the flesh
“I eat the flesh.”

(1a) のように抱合した例では、名詞は不定の解釈を受け、動詞は習慣的・恒常的な意味を持つ。それに対して (1b) のように抱合せずに外置した場合、名詞は定の解釈を受けることが可能であり、動詞は一回的な動作を表すことができる。

また、抱合の大きな特徴として、動作主は抱合されない、という現象を挙げる事が出来る。例えば、Polinsky (1990) は以下のチュクチ語の例を挙げて、他動詞の主語の抱合が不可能であることを述べている。(2a) は抱合せず外置した例、(2b) は抱合の例であり、(2b) で抱合された名詞 *ətləge*「父」は他動詞の目的語としての解釈しか受けることが出来ない。

- (2) a. *ətləg=e* *qoraŋə* *təm-nen*
father=ERG reindeer (ABS) kill=AOR..3SG:3SG
“The father killed the/a reindeer.”
- b. *qoraŋə* *ətləge=nme=gʔe*
reindeer (ABS) father=kill=AOR.3SG
*“The father killed the reindeer.”
“The reindeer killed the father.”

Polinsky (1990) はチュクチ語における自動詞主語の抱合について述べているが、挙げてある例をみると全て無意志、意味役割でいうと「対象 (theme)」の主語であり、意味役割が「動作主」である主語の抱合の例は挙げられていない。Sadock (1985) は南ティワ語 (Southern Tiwa) において抱合されやすい名詞、されにくい名詞を調査した結果、主語、特に有生 (animate) の主語は抱合されにくく、目的語は抱合されやすい、ということ述べている。また、Sasse (1984) によれば、東クシ諸語 (Eastern Cushitic languages) Boni 語の抱合はかなり自由度が高く様々な名詞を抱合するが、主語の抱合は目的語の抱合に比べて起こりにくく、特に定 (definite)・特定 (specific)・指示的 (referential) である主語の抱合はほとんど起こらない。Axelrod (1990) の記述によれば、アサバスカ語族・コユーコン語 (Koyukon Athabaskan) では、被動者、対象、様態、道具、場所など様々な名詞を動詞に抱合するが、主語を抱合する場合は無意志のものに限られる。これまでになされてきた抱合に関する研究を見る限り、意思を持つ「動作主」を抱合する例はほとんど報告されていない¹。

一方、疑似抱合 (pseudo incorporation²) は、動詞と別の語が緊密な纏まりを為していると判断できるものの、完全に一つの語には成りきっていない現象を言う (Massam 2001, Dayal 2003, 2007, Booij 2008, 2009 など)。本稿では「疑似抱合」を以下のように定義する：疑似抱合は、動詞と別の要素が統語的側面から一つの単位を為していると判断できるが、音韻的側面 (双方の要素にアクセントがある, など)、形態的側面 (格標示など名詞の形態的機能の一部保持, など) などから判断して、複合語とは認められない現象を指す。

疑似抱合は、例えばハンガリー語に見られる。Farkas (2006: 84) は、ハンガリー語において、以下 (3) のような語順では名詞に限定詞を付けることが可能であるが、(4) のように動詞の直前に名詞を置いた場合は限定詞を名詞に付けることが出来ず、名詞が必ず不定の解釈を受けるとし、これを一種の抱合と捉えている。

¹ Myhill (1988) はインドネシア語における動作主の「抱合」について述べている。例えば以下のような例である。

... terdengar olehnya pintu kamarnya diketuk orang perlahan-lahan
 ... heard by-her door her-room knocked person slowly
 “... she heard her door being knocked on (by a person) slowly”

しかし、これは抱合というよりも動作主がクリティック的に動詞の後ろに付属していると考えられることも可能であり、これが動作主の抱合の例であるかどうかは議論の余地がある。

² Quasi incorporation 及び semantic incorporation という用語もある。Miner (1986, 1989) の言う noun stripping もこれに似た側面を持つ現象である。ここでは、pseudo incorporation という語を「疑似抱合」と訳し使用する。

(3) Anna olvas egy verset “Anna reads a poem.”
Anna reads a poem.ACC

(4) a. Anna verset olvas “Anna poem reads/ Anna is reading poems.”
Anna poem.ACC reads

b. Anna verseket olvas “Anna poems reads/ Anna is reading poems.”
Anna poem.PL.ACC reads

(4) では *verset* 「詩」という名詞に限定詞を付けることはできないが、単数・複数の区別が可能である。通常の抱合とは異なり「抱合」された要素に語としての独立性が一定程度残っている。名詞+動詞は完全な一語にはなっているとは言い難く、その結合度は語への抱合より弱い。Booij (2009) はこのような例を「疑似抱合」と捉えており、彼に従って本稿でも (4) の例を「疑似抱合」と考える。

NV複合語には、日本語の「苺狩り」、「缶けり」、「人殺し」などの例や、英語の“berry-picking”, “bird-watching” などの例がある。この場合も、動詞と組み合わさった名詞は必ず不定かつ非指示的な解釈を受ける。例えば、特定の缶を蹴ることを「缶けり」ということは出来ないし、特定の狐を狩ることを“fox-hunting” という事は出来ない。

上記三種類の動詞複合体では、いずれにおいても動作主の名詞が動詞と組み合わる例はほとんど報告されていない。抱合において、動作主が抱合される例はほぼ皆無であることは既に上で確認した。疑似抱合においてもこれと同様の制約が働いているとみられ、疑似抱合される名詞は、(4) の例にあるように、被動者名詞句が多く、Farkas (2006) , Kwon and Zribi-Hertz (2006) , Booij (2008, 2009) などの先行研究を見ても、動作主が疑似抱合される例は今まで言及されていない。NV複合語でも、狩人がイノシシを狩ることを「イノシシ狩り」とは言えるが「*狩人狩り」と言えない。また、子供が走ることを「*子供走り」と言うことは出来ない。

上記のように、動詞複合体における名詞は一般に不定かつ非指示的な解釈を受けるのが普通である。抱合において定・指示的な名詞は抱合されにくく、疑似抱合・NV複合語においても動詞と組み合わされた名詞は不定の解釈を受ける。しかし、定の名詞を許容する例がドイツ語と日本語に見つかっている。これを以下第2節及び第3節で見ていく。

2. ドイツ語動詞句話題化構文

通常ドイツ語の主文平叙文では文の第二番目の位置を定動詞が占め、それに先行して前域に出ることが出来るのは名詞句、副詞などの一つの要素だけである。しかし「名詞句・副詞・前置詞句 + (定形ではない) 動詞」を文の第一番目に置くことが可能である動詞

句話題化構文が例外としてある。以下 (5) はその話題化構文の例である³。

- (5) a. **Einen Autounfall gebaut** hat er noch nie.
b.? **Ein Autounfall passiert** ist ihm noch nie.
c.??**Ein Politiker geredet** hat in diesem Dorf noch nie.
d.***Ein Hund gebissen** hat ihn noch nie.

吉田ほか (2001: 168-169) では (5a) および (5b) が文法的, (5c) は非文法的である, とされている。生成文法の枠組みでは (5a) 及び (5b) の **Autounfall** は動詞句の内項であるため容認され, (5c) の **Politiker** は外項であるため容認されない, と考える (Grewendorf (1989))。しかし, 著者が母語話者 10 人にアンケート調査を行ったところ, (5a) は比較的良いと判断され, (5b) は文法性がかなり下がり, (5c) は一部容認する話者もいるがほぼ非文法的, (5d) は全員が非文法的と判断するという結果, つまり, (5a) から (5d) にわたって徐々に文法性が下がっていくという結果が出た (今西 (2007) ⁴)。目的語の容認度が一番高く, 次に被動者的な自動詞の主語 (「非対格動詞」と呼ばれる自動詞の主語), その次に動作主的な自動詞の主語 (「非能格動詞」と呼ばれる自動詞の主語⁵), 最も容認度が低いのが他動詞の主語である。

また, 前置詞句や副詞と動詞の過去分詞を組み合わせて助動詞に前置することも可能である。

- (6) a. **Bei ihren Eltern gewohnt** hat Silke damals, als sie klein war.
b. **Offen gesprochen** haben wir niemals.

本稿では (5) や (6) のような例を一種の疑似抱合と考える⁶。疑似抱合によって名詞

³ „Fremdsprachliche Zeitungen lesen würde er nie.“ „Bei ihren Eltern wohnen will Silke sicherlich nicht.“など, 名詞句+動詞不定詞の組み合わせも可能であるが, この「不定形+助動詞」の構文もとりあえずは「過去分詞+助動詞」の構文と同じ特徴を持つと判断し, 本文中では「過去分詞+助動詞」の例のみを扱う。

⁴ 著者は卒業論文でドイツ語の動詞句話題化構文のアンケート調査および分析を行った (今西 (2007))。アンケート調査では, まず著者自身がドイツ語の例文を作って母語話者に校正を受け, そのうえでその例文を全て動詞句話題化構文に変える, という方法で例文を作り, その例文の文法性を母語話者 10 人に判断してもらった。

⁵ 「非対格動詞」(unaccusative verbs)「非能格動詞」(unergative verbs)については Burzio (1986), Grewendorf (1989)などを参照。

⁶ ハンガリー語の疑似抱合の例では名詞に限定詞を付けることが出来ないなど, 名詞の形態統語的振る舞いにかかなり強い制約があるのに対し, ドイツ語の動詞句話題化構文では名詞に限定詞をつけることも出来るなど, 制約が少ない。ハンガリー語の疑似抱合を疑似抱合の原型 (prototype) と捉えると, ドイツ語は原型から少し離れた特徴を持っている

句・前置詞句・副詞と動詞の過去分詞が一つのまとまりとして捉えられることにより、本来は一つしか入ることのできない文の第一番目の位置に二つの要素（「名詞句・副詞・前置詞句」と「動詞」）が入ることが可能であると考え。つまり、統語的要因（文の二番目に定動詞）により、前域の要素が一つのまとまりを為していると考えられるが、形態的要因（格標示の保持）や音韻的要因（アクセントの保持）により、前域で一つのまとまりを為している要素が複合語であるとは言えない。(5d)に見られるように、動詞句話題化構文では動作主が動詞と組み合わせられない。これは、疑似抱合もその中に含まれる、動詞複合体の特徴である。

上記 (5) や (6) のような構文では、疑似抱合された句は非指示的 (non-referential) である場合が多い。以下、(7a) は不定で非指示的、(7b) は不定で指示的、(7c) は定で指示的な例である。これらの文をドイツ語話者に文脈無しで提示したところ、(7b) はほぼ非文法的であり、(7c) は完全に非文法的であると判断した。

(7) a. **Einen Autounfall gebaut** hat er noch nie. (= (5a))

b.*?**Einen Autounfall gebaut** hat er.

c.***Den Autounfall gebaut** hat er

この構文では様態副詞は動詞の過去分詞と組み合わせることが出来るが (vgl. (6b)), 他の種類の副詞が組み合わせることは難しい。例えば, *gestern* のような時間副詞や *vielleicht* のようなモダリティを表す副詞を動詞 (の過去分詞) と一緒に前置すると、容認度はかなり低い。

(8) a.*?**Gestern gesprochen** haben wir daüber.

b.*?**Vielleicht gesprochen** haben wir daüber

と考えられる (以下本文中で議論するように、原型から離れているが故、ドイツ語の動詞句話題化構文はハンガリー語疑似抱合などとは異なった振る舞いを示すと言える)。この分析による問題点は以下の下線部のような表現をも疑似抱合として捉える可能性が出てくる点である。

(i) Silke hat damals **bei ihren Eltern gewohnt.**

(ii) Wir haben niemals **offen gesprochen.**

この (i) (ii) のような表現も、かなりの拡大解釈をすれば疑似抱合としてまとまりであると言えるかもしれないが、これらの例では本稿の疑似抱合の定義「統語的に一つの単位を為している」を支持する強い証拠が存在しない (少なくとも、動詞句話題化構文のように、前域にも関わらず二つの要素が許容される、といった強力な証拠はない) ため、これらが疑似抱合であるとの分析は行わない。

抱合においても、様態副詞のみが動詞と組み合わせたり、それ以外の副詞は組み合わせられない例が報告されている。Rivero (1992: 296, 299) によれば、現代ギリシャ語では *tóra* 「今」などの時間を表す副詞や *pánda* 「いつも」などの頻度を表す副詞は抱合できないが、*argá* 「ゆっくり」や *kalá* 「よく」などの様態を表す副詞は *argomasó* 「(私は) ゆっくり噛む」や *kalovlépo* 「よく見える」などのように抱合することが可能である。

ドイツ語の動詞句話題化構文が抱合と異なるのは、この構文において定の名詞句が許容される例があるということである。

(9) a. **Die Oper gesehen** hat er noch nie. (cf. (7c))

b. **Anna gebissen** hat er noch nie.

これらの例は定冠詞のついた定・指示的な名詞句や固有名詞が用いられているにもかかわらず容認度は高い。また、今西 (2007) の調査によれば、以下 (10) における定・不定のペアはほぼ同じ容認度を持ち、(11) に至っては定の名詞句を用いた (11b) の方が容認度が高いという結果が出た。

(10) a. **Ein Haus angezündet** hat der Junge gestern Abend.

b. **Das Haus angezündet** hat der Junge gestern Abend.

(11) a. **Einen Dieb verhaftet** hat die Polizei sehr geschwind.

b. **Den Dieb verhaftet** hat die Polizei sehr geschwind.

ドイツ語の動詞句話題化構文は抱合などの動詞複合体と以下の点で類似している。[1] 動作主は動詞的要素と組み合わせられない; [2] 不定・非指示的な名詞句ほど動詞的要素（過去分詞）と組み合わせることが容易である; [3] 副詞的要素を許容する。その際、様態副詞は許容されやすく、時間やモダリティを表す副詞は許容されづらい。これらの共通点より、ドイツ語の動詞句話題化構文において前置された句は動詞複合体の一種であり、その中でも複合語の形成ではない疑似抱合であると考えられる。

しかし、ドイツ語の動詞句話題化構文は、抱合・NV 複合語などの動詞複合体と異なり、(9), (10), (11) に見られるように、定の名詞句を許容する場合は認められる。この要因については、以下第4節で議論を行う。

3. 日本語のNV複合語

日本語のNV複合語も本稿でいう動詞複合体の一種であると考えられる。影山 (1993, 1999) が述べているように、日本語（そして他の言語）のNV複合語では他動詞の目的語が最も頻繁に用いられる。自動詞の主語も用いることが出来るが、ほとんどは対象などに近い意味役割を持っているものに限られる⁷。

- (12) a. 苺狩り
b. 紅葉狩り
c. 缶けり (全て他動詞目的語)

- (13) a. 雨降り
b. 雪解け
c. 肩こり (全て対象的自動詞主語)

(12), (13) のようなNV複合語において、名詞は特定のものではなく必ず総称・一般的な意味で理解される⁸。

また、(14) のように、わずかだが動作主的と思われる名詞と名詞化した動詞を組み合わせる例もある (cf. 影山(1993, 1999))。これらの例は生産的ではなく、意味もイディオムので、もはや透明ではない。

- (14) a. 神隠し
b. 虫食い

副詞的な表現（道具・場所・様態などを表す表現）もこの複合語で表すことが出来る。意味は (15a) のように透明なものから、(15d) のように完全に予測不可能なものまで含ま

⁷ Polinsky (1990) が述べているように、抱合においても被動者的な自動詞の主語は許容される場合がある。

⁸ 片方の肩をさすりながら「今日は肩こりがひどくて…」などという場合「肩」は特定のものを指しているという議論も可能だが、この「肩」が発話者の肩を指示しているかどうかは議論の余地がある。以下の例を参照されたい（例文は吉田光演（私信）より）。

- (i) 太郎は先週肩を痛めた。そこは以前も痛かった。
(ii) 太郎は先週肩こりに悩まされた。??そこは以前も痛かった。

(ii)において「そこ」が「肩こり」の「肩」を照応出来ない。これは「肩こり」の「肩」が太郎の肩という特定の肩を指示しているのではなく、「『肩がこる』という現象が太郎に起こっている」という解釈を取る方が自然であることを示している。

れる。

- (15) a. ひざ蹴り
b. 田舎暮らし
c. タコ踊り
d. 袋叩き

本稿の観点から問題となるのは、以下 (16) のような例である。

- (16) a. アメリカ帰り
b. 麻生降ろし
c. 田中いびり

影山 (1993, 1999) では特に大きな問題として触れられていないが、日本語のNV複合語は(16)のように固有名詞と名詞化した動詞の複合語を生産的に作ることが可能である。英語にもNV複合語が存在する(“fox-hunting”など)が、固有名詞と動名詞を組み合わせることは不可能である(“*Jack-bullying”)。日本語のNV複合語と英語のNV複合語はこの点で異なっている。固有名詞のような定名詞を許容するという点で日本語のNV複合語は通言語的に珍しい特徴を持っており、ドイツ語の動詞句話題構文と同様、定名詞句を動詞的要素と組み合わせることが出来る特殊な例の一つである。

4. 動詞複合体において指示的な名詞が許容される場合

第1節で述べたように、動詞複合体における名詞は不定かつ非指示的の解釈を得るのが普通である。第2節で述べたドイツ語の動詞句話題化構文、第3節で述べた日本語の複合語はこれに対する例外である。以下、両者でなぜ定名詞句が許容されるのかを考察する。

4. 1. ドイツ語の場合

第2節で述べたように、ドイツ語の動詞句話題化構文では定・指示的な名詞句が許容される場合がある。その理由を考えるため、まず、一般的に動詞複合体ではなぜ定・指示的な名詞が容認されないという制約が働くのかを考える。そして、ドイツ語の動詞句話題化構文にはその制約が働かないことを示し、それによりドイツ語の動詞句話題化構文で定・指示的な名詞句が容認されることがある理由を述べようと思う。

抱合・疑似抱合・NV複合語など動詞複合体は、名詞・副詞などと動詞を組み合わせ、最終的には動詞の特徴を持つ語が形成される。動詞としての特徴を持つ語であるため、動詞の特徴に反する名詞・副詞などを組み入れることは出来ない。動詞の特徴とは、**外界に**

特定の指示対象を持たないということである。定 (definite) や指示的 (referential) な動詞は存在しない。名詞は外界の特定の指示対象を持つこともあるし持たないこともある。固有名詞は外界に特定の指示対象を持つ、あるいは指示対象を持っていた場合しか存在しない。このような名詞と似たような形で動詞が外界に指示対象を持つことはない。動詞という語彙クラス自体が表すのは常に抽象的な動作や状態のみである。よって、語彙としての動詞を形成するプロセスには定・指示的な名詞句をその中に組み込むことは不可能である。これが、典型的な動詞複合体で定・指示的な名詞が許容されない理由である。

それに対して、上記 (5), (6) のようなドイツ語動詞句話題化構文において前置された二つの要素 (名詞句・副詞・前置詞句と動詞の過去分詞形・不定形) は語彙としての動詞を形成しているわけではない。この構文で形成されるのは特定の文脈において一度限り発話される句であり、辞書に登録する必要があるような語彙ではない。よって、その場において適切な文脈さえあれば、定・指示的な名詞を動詞 (の過去分詞) と組み合わせることが可能である⁹。典型的な動詞複合体の特徴である「動詞形成」という特徴を備えていないため、ドイツ語動詞句話題化構文は定・指示的な名詞を許容すると考えられる。

ドイツ語動詞句話題化構文における疑似抱合は複合動詞 (= 語) の形成とは異なっている。しかし、前域にある両要素 (「名詞句・副詞・前置詞句」と「動詞」) が疑似抱合という形で純粋な統語的配列よりも強い結びつきを持っている。そのため、前域に両要素を配置する構文が許容される。著者は、ドイツ語動詞句話題化構文における疑似抱合は、語形成と統語的な句形成と中間に位置していると考えている。前域の両要素の配列は、本来は統語的な配列である。しかし、不定の名詞句や様態副詞など、動詞とまとまり (動詞複合体) を作り易い要素が動詞と一緒に配列されることにより、純粋な統語的配列から複合動詞の形成に一步近づいた表現になったものと考えられる。

4. 2. 日本語の場合

日本語のNV複合語における定の名詞の許容においては、ドイツ語の場合とは違うメカニズムが働いている。それは、日本語動詞の連用形の特徴である。連用形を動詞の変種ではなく一種の名詞と考えれば、定の名詞 (固有名詞) が許容される理由を説明できる。

日本語の連用形は、例えば上記 (12) などのように「名詞+連用形」という配列の複合語だけでなく、以下 (17) のように「連用形+名詞」という順番で複合語を作ることも可能である。

⁹ 今西 (2007) の調査においては、自動詞主語+動詞、他動詞目的語+動詞の組み合わせのどちらについても、全体として定の名詞句の容認度が低いという結果が出た。つまり、Grewendorf (1989) や Haider (2010: 2) のいう「定性効果」 (“definiteness effect”) が認められる。本稿はこの「定性効果」が絶対的な規則ではなく、文脈によってはそれが現れない場合もあるということをも主張している。どのような文脈においてこの「定性効果」が打ち消されるのかについての議論は今後の課題としたい。

- (17) a. 食べ物
b. 捨て猫
c. 落ち葉
d. 泣き顔

英語ではこのように順番を変えて複合語を作ることは不可能である。語順を変えてしまうとそれは既に複合語として解釈されなくなってしまう。例えば“picking berry”や“hunting fox”などは形態のレベルではなく統語レベルの組み合わせである。これは、英語の動名詞に比べて日本語の連用形は名詞の特性を非常に強く持っているということを示唆している。

さらに、英語の動名詞と違って日本語の動詞連用形は、動詞が取るであろう名詞句と同じ格を持った項を取ることが出来ない。

- (18) a. hunting foxes
b. *狐を狩り（狐の狩り / 狐を狩ること）

このことも日本語の動詞連用形が英語の動名詞よりも名詞に近い特徴を持っていることを示唆している。

日本語の連用形を名詞と考えれば、固有名詞と連用形が組み合わさって語彙を形成することが出来る理由が説明できる。動詞と違って名詞は固有名詞と組み合わさって生産的に語彙を形成することが出来る。これは上記 4.1 で述べた、外界に特定の指示対象を持つことが出来るという名詞の特徴に依っている。

- (19) a. アメリカ合衆国
b. 麻生内閣
c. 田中商事

(16) の「アメリカ帰り」などの例はこれに似たプロセスが働いて固有名詞を許容していると考えられる。つまり、日本語の NV 複合語は NV というより NN としての側面を強く持っていると考えれば、固有名詞が許容される理由を説明することが出来る¹⁰。

¹⁰ 連用形「帰り」は「帰りが遅い」「帰りを待つ」「帰りのバス」など名詞としてかなり広く用いることが出来るが、「*あれは帰りだ」「*太郎は帰りだ」のように「A は B だ」の構文で用いることは不可能である。名詞の中にも「A は B だ」構文で B に入ることが出来ないものがある。例えば「存在」「動作」などの一部の抽象名詞はこの構文で用いることは難しい（「*?あれは存在だ」「*?あれは動作だ」）。「犬」「机」など具体的な事物を指

5. まとめ

抱合・英語の NV 複合語などの動詞複合体で定性・指示性の制約が働くのは、それらが動詞、あるいは動詞に近い語彙を形成するプロセスだからである。動詞は外界に指示対象を持つことが出来ないため、定・指示的な名詞を動詞に組み込むことは出来ない。そのため、語彙形成プロセスでは定・指示的な名詞の介在は許容されない。

動詞複合体において定・指示的な名詞が許容される例はドイツ語の動詞句話題化構文、及び日本語の NV 複合語において見つかっている。両者は別のメカニズムが働いていると考える。

ドイツ語の動詞句話題化構文は疑似抱合の一種である。この構文は語彙形成のプロセスではなく、特定の文脈において一回限り用いられる表現を作る構文である。そのため、定性・指示性の制約が働かず、適切な文脈があれば定・指示的な名詞句が許容される。

日本語の NV 複合語では別の原則が働いて定・指示的である固有名詞を許容している。それは、日本語特有の規則、すなわち、連用形の名詞化の度合いの強さである。日本語の連用形は動詞と言うよりも名詞としての特徴を強く持っている。固有名詞と一般名詞を組み合わせて複合語を作る例は多数ある。日本語の NV 複合語で固有名詞が許容されるのは、連用形が名詞としての特徴を強く持っていて、名詞+動詞というよりも名詞+名詞の複合語を作っているからであると考えられる。

ドイツ語と日本語ではそれぞれ異なる原則が働くことによって定・指示的な名詞（句）を動詞的要素と組み合わせている。抱合などの動詞複合体では、名詞や副詞を名詞化していない動詞と組み合わせて語彙を形成する。ドイツ語と日本語の例は両者ともに、抱合などの原型（プロトタイプ）的な動詞複合体からかなり異なった特徴を持っている。これが定・指示的な名詞句の許容という特徴を生み出している要因であると考えられる。このような動詞複合体の変種は以下のように纏める事が出来る。

す名詞は「A は B だ」構文でも用いることが出来、これらを原型的な名詞と捉えれば、「A は B だ」構文で用いられない「存在」「動作」などの抽象名詞は原型的な名詞から少し離れた特徴を持っていると判断しても問題ないだろう。単独の動詞連用形の中で「A は B だ」構文に用いることが出来るのは、「いじめ」「飲み」など一部に限られる（「あれはいじめだ」「太郎は（今夜）飲みだ」など）。このことは「いじめ」「飲み」などの例の名詞化の度合いが他の連用形（「帰り」など）よりも高く、これらが原型的な名詞に近い特徴を持っている可能性を示唆している。興味深いのは、「*太郎は帰りだ」に対して「太郎はアメリカ帰りだ」「太郎は朝帰りだ」「太郎はとんぼ帰りだ」、あるいは「*あれは降ろしだ」に対して「あれは麻生降ろしだ」などは可能なことである。このことは、単に「帰り」「降ろし」などの意味的な制約による可能性もあるが、連用形単独よりも名詞と組み合わせた複合語のほうがより名詞としての性質を強く持つようになる（名詞として用いられやすくなる）可能性を示している。

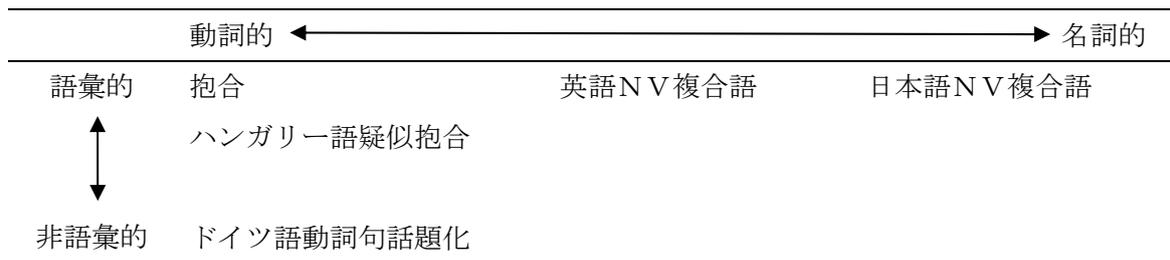


図1 動詞複合体の変種

原型的な動詞複合体は動詞的な語彙形成であり、抱合がその例である。英語のNV複合語は名詞的な特徴も持つため原型的な動詞複合体とは言えないが、日本語のNV複合語に比べると原型に近い特徴を持っている。原型的な動詞複合体では、定・指示的な名詞は許容されない。その原型から離れ、動詞が名詞的に変化していたり、語彙的ではなく即興的に組み合わせを形成するプロセスであったりする場合は、定・指示的な名詞が許容される。

本稿では、基本的に定の名詞が容認されないことが多い「動詞複合体」において、定の名詞を動詞と組み合わせることが出来るドイツ語と日本語の例を分析し、それぞれの例が別の要因によって定の名詞句を許容している可能性について述べた。今後、ドイツ語動詞句話題化構文において定の名詞が許容される条件（文脈など）についてより詳細な調査をしていくことによって、ドイツ語動詞句話題化構文と、ハンガリー語型の疑似抱合、あるいは抱合などとの共通点・相違点についてより正確な分析を行っていく必要がある。

参考文献

- Axelrod, Melissa (1990): Incorporation in Koyukon Athapaskan. *International Journal of American Linguistics* 56, 179-195.
- Booij, Geert E. (2008): Pseudo incorporation in Dutch. *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 46, 3-26.
- Booij, Geert E. (2009): A constructional analysis of quasi-incorporation in Dutch. 『言語研究』135, 5-27.
- Burzio, Luigi (1986): *Italian Syntax: a government-binding approach*. Dordrecht: D. Reidel.
- Dayal, Veneeta (2003): A semantics for pseudo incorporation. Ms.
- Dayal, Veneeta (2007): Hindi pseudo incorporation. Ms.
- Farkas, Donka (2006): The unmarked determiner. In: S. Vogeleer & L. Tamowski (eds.), 81-106.
- Gerdts, Donna B. (1998): Incorporation. In: A. Spencer & A. Zwicky (eds.), *The handbook of morphology*, 84-100. London: Blackwell.
- Grewendorf, Günther (1989): *Ergativity in German*. Dordrecht: Foris.
- Haider, Hubert (2010): *The syntax of German*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kwon, Song-Nim and Anne Zribi-Hertz (2006): Bare objects in Korean. In: S. Vogeleer & L. Tamowski (eds.), 107-132.
- Massam, Diane (2001): Pseudo noun incorporation in Niuean. *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 153-197.
- Miner, Kenneth L. (1986): Noun stripping and loose incorporation in Zuni. *International Journal of American Linguistics* 52, 245-254.
- Miner, Kenneth L. (1989): A note on noun stripping. *International Journal of American Linguistics* 55, 476-477.
- Mithun, Marianne (1984): The evolution of noun incorporation. *Language* 60, 847-894.
- Mithun, Marianne (2000): Incorporation. In: G. Booij, J. Mugdan & C. Lehmann (eds.), *Morphologie: ein internationales Handbuch zur Flexion und Wortbildung* (in collaboration with Wolfgang Kesselheim & Stavros Skopeteas), 916-928. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Myhill, John (1988): Nominal agent incorporation in Indonesian. *Journal of Linguistics* 24, 111-136.
- Polinsky, Maria S. (1990): Subject incorporation: evidence from Chukchee. In K. Dziwirek, P. Farrell, & E. Mejias-Bikandi (eds.), *Grammatical relations: a cross theoretical perspective*, 349-364. CSLI publications.
- Rivero, María-Luisa (1992): Adverb incorporation and the syntax of adverbs in Modern Greek. *Linguistics & Philosophy* 15, 289-331.
- Sadock, Jerrold M. (1985): The Southern Tiwa incorporability hierarchy. *International Journal of*

American Linguistics 51, 568-572.

Sapir, Edward (1911): The problem of noun incorporation in American languages. *American Anthropology* 13, 250-282.

Sasse, Hans-Jürgen (1984): The pragmatics of noun incorporation in Eastern Cushitic languages. In: F. Plank (ed.), *Objects: towards a theory of grammatical relations*, 243-268. London: Academic Press.

Vogeleer, Svetlana and Liliane Tasmowski (eds.) (2006): *Non-definiteness and plurality*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

今西一太 (2007): 『ドイツ語の動詞句話題化構文について』卒業論文. 広島大学.

影山太郎 (1993): 『文法と語形成』ひつじ書房.

影山太郎 (1999): 『形態論と意味』くろしお出版.

吉田光演、保坂靖人、岡本順治、野村泰幸、小川暁夫 (2001): 『現代ドイツ言語学入門—生成・認知・類型のアプローチから』大修館.

Definitheit nominaler Ausdrücke im Verbalkomplex

Kontrastierender Vergleich zwischen dem Deutschen und dem Japanischen

Kazuhiro IMANISHI

Die vorliegende Arbeit behandelt sog. *Verbalkomplexe* („Substantiv/Adverb + verbales Element“), bei denen das Substantiv eine definite Nominalphrase ist. Hierzu werden die folgenden Thesen aufgestellt: (1) In der Regel werden definite Nominalphrasen nicht mit einem verbalen Element zum Verbalkomplex kombiniert. (2) Deutsche VP-Topikalisierungskonstruktionen und japanische Komposita gehören zwar zur Gruppe der Verbalkomplexe, sind jedoch Ausnahmen dieser Regel, und (3) es gibt zwei Fälle, in denen definite Nominalphrasen mit einem verbalen Element verschmelzen können: Entweder sie bilden keine lexikalische Einheit, oder das nominalisierte verbale Element wird effektiv zu einem Substantiv.

Der Verbalkomplex ist zusammengesetzt aus Inkorporation, Pseudo-Inkorporation und Kompositum nach dem Schema ‚Substantiv + nominalisiertes Verb‘. In der Inkorporation und Pseudo-Inkorporation ist das inkorporierte Substantiv normalerweise indefinit und hat keinen realen Referenten (Mithun 1984, Farkas 2006). Das gilt beispielsweise auch für Substantive in englischen verbalen abgeleiteten Komposita, z.B. *fox-hunting*, *berry-picking*, etc.

Das topikalisierte Element in der VP-Topikalisierungskonstruktion im Deutschen wie „**einen Autounfall gebaut** hat er noch nie“ gehört ebenfalls zu den Verbalkomplexen. Allerdings ist es in solchen Fällen trotzdem möglich, ein definites Substantiv mit einem infiniten Verb zu kombinieren (Bsp. „**Den Dieb verhaftet** hat die Polizei sehr geschwind“), da der Verbalkomplex hier kein einzelnes Wort (Verb) mehr ist, sondern ein improvisierter Ausdruck, der nur ad hoc und in einem spezifischen Kontext verwendet wird. Wäre der Verbalkomplex insgesamt wiederum ein Verb, würde es unmöglich, definite Substantive mit einem Verb zu kombinieren, denn Verben ohne Referenten und definite Substantive mit realen Referenten widersprechen sich.

In japanischen Komposita der Form ‚Substantiv + nominalisiertes Verb‘ können Eigennamen, d.h. definite Substantive, mit einem Verb kombiniert werden, z.B. *Amerika-gaeri*, ‚Amerka-Zurückkehren [das Zurückkehren aus Amerika]‘. Ein solches japanisches nominalisiertes Verb weist jedoch keinerlei Merkmale eines Verbs auf, es ist in der Tat als ein Substantiv zu konstatieren. Ein definitiver Eigenname kann folglich dann mit einem nominalisierten Verb kombiniert werden, da das Ergebnis der Kombination ein Substantiv ist, das wiederum einen Referenten aufweisen kann.